＊＊＊紹　介＊＊＊

本書は、著者の三〇年余の研究の総まとめとして編まれたものだという。長年にわたり続けてこられた調査と研究の成果が、この充実した一冊として結実したことを大いに喜びたい。

（坂井　建雄）

〔思文閣出版、京都市左京区田中関田町二―七、二〇〇七年二月、A五判、三二六頁、六八〇〇円（税別）〕

看護史研究会　編

平野重誠原著『病家須知』翻刻訳注篇〈上・下〉研究資料篇

江戸時代後期の開業医平野重誠（革谿）（一七九〇―一八六七）の著作『病家須知』八巻（一八三二―三四）が三冊に分けて出版された。古文になじまない読者には、まことに親切で、適切な書物であるというのが私の第一印象であった。

看護史研究会の平尾真智子氏所蔵本を底本として、これを翻刻したものであるが、この際旧漢字、俗字、古字、異体字等は現行字体に、変体仮名も平仮名に改められているので読みやすい。本文の下の欄には現代語訳を掲げ、これは原文に忠実というよりは、内容の理解を意図したもので、さらに頭注を付して用語や背景の説明がなされている。その上に膨大な研究資料篇の一冊を作り、原著者や各巻について行き届いた解説が行われ、索引もテーマ別に六種が用意されている。

全体の監修者は北里研究所東洋医学総合研究所の小曽戸洋教授であり、現代語訳者は東洋医学に造詣の深い、松相堂医院の中村篤彦院長で、本書の信頼性を高めている。

看護史研究会の坂本玄子代表の序文によると、同研究会は『病家須知』を江戸末期の看護書として取り上げ、この本から現代の看護者が学ぶ点を見出そうと考え、幾多の困難をのりこえ、漸く出版に至ったという。これは全く看護史研究会の方々の熱意と努力の結晶である。

さて「病家須知」とは「病人のある家でぜひ知っておくべき事柄」を意味するが、原著者はこれを八巻の構成にして、巻一―四を前篇（天保三年出版）に収め、これに『病家こころえぐさ（意得草、心得草）』の別名を与えている。また巻五―八を後篇（天保五年出版）に収め、これには前篇に対し某宮家から賞賛と『ことぶき草』という書名を賜ったことを受けて、各巻に『ことぶき艸（草）』の別名を与えている。しかし本来の『病家須知』は巻五―六までで、巻七―八はもと『坐婆必研』の書名で別に出版する積りのところ、産婆や妊婦の読者の都合を考えて合刻の形で刊行したと述べている。『坐婆必研』は「産婆必携」の意味であるが、これを原名或は別名として『とりあげばば心得草（坐婆心得草）』を本名にしている。このような表題の複雑さは、後篇が二年遅れて出版されたため、その間における重誠の心積りの変化によるものであろう。